

木材のいにしえを探るシリーズ2：
—国有林で活躍した林業機械メーカーは今どうなったか？—

日本で初めてアメリカのボールドウィン工場に森林鉄道用の蒸気機関車を発注したのは1913年（大正2年）である。今年は2013年だとすると、ちょうど100年前に当たる。実際に走ったのは2年後であるが、それを記念して、国有林で活躍した林業機械メーカーのその後を見てみよう。

森林鉄道で有名なのが、雨宮製作所。1907年に創業し、鉄道経営に自家生産し安く供給するために始めた。後に鉄道経営部門と合併し大日本軌道と合併したが、関東大震災で工場が壊滅し、昭和初期に姿を消した。

次に、立山重工業から蒸気機関車を購入している富山市に本社工場があったが、戦後大谷製銅所富山工場となったが、解散し工場は大谷製鉄となったが新湊市に新工場を建設し現在富山工場はない。

次に登場するのは、酒井工作所である。酒井工作所は1949年（昭和24年）設立で酒井重工業と名前を変え、建設機械メーカーの大手として東証一部に上場している。

今度は集材機メーカーをみてみよう。当然当初は輸入品だが、最初に登場するのは、森藤鉄工所で昭和6年に国産初のガソリン集材機が納入されている。大正5年に森藤鉄工所として川口市に創業している。この会社は現在も株式会社モリトウとして林業機械を作っている。

次は、何と言っても富士産業株式会社岩手工場である。自動遠心式クラッチを組み込んだY型集材機である。元々は富士産業（今の富士重工業）の疎開先の工場であったが、戦後中島飛行機の技術者いわゆるスバルが平和産業創設のため協力して、岩手富士産業となり、現在はイワフジとして、引き続き林業機械メーカーとして活躍している。

次は、南星工作所でアベックキャリアを使用するエンドレスタイラー式の集材機である。こちらも熊本県菊池市にあり、現在も南星の社名として林業機械メーカーとして活躍している。

この他に森林鉄道関連では協三工業があり、福島市に本社があり、現在でも小型ディーゼル機関車や遊園地の小型鉄道車両をつくっている。社名は毛利元就の3本の矢に由来し、3兄弟が一致団結して事業に当たるとの意味である。加藤製作所の名前もある。こちらは現在品川区に本社を持ち各種クレーンを中心に機械メーカーとして東証一部に上場している。

引き続き林業と関わりのある会社もあるがそうではない会社もある。どちらにしても、かつての協力に感謝し、引き続きの会社の隆盛をお祈りします。